

冬のスポーツの花の一つとしてマラソンと駅伝があります。駅伝は細い一本の「襷 (たすき)」に伝統・歴史・名誉・信頼を託して繋いで行く長丁場の継走であり、戦いでもあります。

駅伝は個人競技と違って、長時間継走のチーム競技でありますから、如何にバランスの良い選手を育て揃えたかであり、また、一人の選手がバランスを崩してブレーキとなれば、せっかくのチームを崩壊させる危険性を持っております。

また現代の駅伝競走の背景には学校、企業、地域代表として名誉・期待が極めて大であり、選手もまたその代表として選ばれた誇りがありますので、いざ襷をもらって走り出せば、その責任の重圧に孤独なランナーとして自らの命を削りながら、ひたすら走る厳しい戦いでもあります。

沿道の観衆もまたこの壮絶な戦う姿に心を打たれ、大歓声を上げて感動のドラマを作ってくれます。しかし駅伝ランナーの厳しさはどんなに体調が悪かろうとアクシデントが起ころうとも棄権する事が出来ない宿命があります。次の中継所には1秒でも早く襷 (たすき) をと待つ仲間が待っております。その待っている仲間を裏切る事が出来ないからであります。

私は学制改革の折、何人かの仲間と新制高校へ編入を断念し、忙殺されている稼業を継ぎましたが、木更津高校陸上部は戦前全国優勝を3回した陸上名門校でしたので競技部へと呼び返され再起の機会を与えられました。

復帰第1戦は全校マラソン (800名) 人見橋折り返し16kを59分台で走り、当時在校生が破る事が出来なかった木内清先生を2分以上離して優勝しました。(木内先生は高齢者1500メートル世界記録保持者) しかし先年亡くなられ、記念メダルを奥さんから遺品として私に送られて参りました。

駅伝の経験は経営者にとっては最高の訓練の場であります。繰り返しになります。次の中継所で寒さに震えながら私の襷を待っている仲間を思い、更に次の中継にも…と思えば一歩でも1秒でも早くタスキを渡す責任があるからでありました。当時はまだ食べ物も十分でない時で、体力も今の様ではなかったので襷を渡した瞬間のめり込んで倒れる者、そのまま崩れ落ちる選手、吐き、のたうって苦しむ選手たちに同じ選手である私自身なぜここまで走らなければならないのだろうかと思いを感じておりました。

私は幸運にも自分が苦しい時は相手も苦しいのだと気付いた事でした。それ以来、俺が苦しい時は相手はもっと苦しいはずだからもうひと頑張りすれば相手は落ちてくると自分に暗示をかけ励まして勝つ事を覚えました。商いも同じです。相手に負けない気力を持つことは練習量を相手より多く持つことであります。帰宅後は稼業の手伝い、宿題も多かったので深夜365日5千~8千メートル走り続けました。

昭和20年代の君津は真っ暗な寂しい道でした。中小企業もまだ「胸突き八丁」 厳しい上り坂です。次の世代が襷を振りかざしていくのを待っております。

青年部は50名を超えました。よくやってくれております。次世代のランナー達が両手を広げて待っております。もう夢の議論は終わりにして実行に移して下さい。夢はいつまで見ていると幻となります。決心すれば覚悟が決まります。